

西南学院が100年を迎える



G. W. パークレー

明治末期、海の向こうからキリスト教伝道のため、アメリカ南部バプテスト派の宣教師がやってきた。その中の1人であるC.K. ドージャーは、キリスト教を広めるために学校をつくろうと考えた。そうして生まれた西南学院は、104人の男子中学校からスタートし、100年を経た今、保育所、幼稚園、小学校、中学校・高等学校、大学、大学院をあわせて約11,000人の総合学園に発展した。その100年の歴史の中で、さまざまな出来事が起こったが、先人たちの努力によって、それを乗り越え、今日の学院の発展があることに感謝したい。

100周年を迎えるにあたり、これまでに100周年事業として、西南学院東京オフィスの開設や各種演奏会、またさまざまな学術記念講演会など多岐にわたっているが、その中の1つに西南学院百年館（松緑館）の建設がある。

百年館は、この3月18日に竣工したが、今後、建物内部の展示工事などの後、10月22日のオープニングセレモニーを経て、開館する予定である。この百年館は、教育・研究活動や課外活動、同窓生活動など地域・社会活動の場を提供することで、学院関係者のネットワークを充実させ、交流の拠点となることを目指している。

その中に設置された西南学院史資料センターは、「(1) 学院創立者C.K. ドージャー並びに学院関係者の事跡及びその歴史を明らかにし、建学の精神の涵養、歴史への理解とその継承を図る。(2) 学院、バプテスト教会及び学院に連なる全ての関係者に係る史料の収集・保存及び調査・研究を行って、それを広く公開して交流の拠点となり、学院の教育並びに研究の充実及び発展に資する。」ということを目的としており、幅広い利用が考えられる。まさに「温故知新」—古きを訪ねて新しきを知る、にふさわしい記念事業であると言えよう。

百年館の1階には、同資料センターの常設展示室と企画展示室を設置し、3階には、資料保管室が2室（文献資料、物品資料）と資料閲覧室を備えている。学院の歴史が身近に感じられる展示や、より詳しく資料を調べたいときには力になってくれるので、大いに利用してもらいたい。

西南学院は、これまで多くの先達の努力や同窓生、地域社会の支援などによって成長し、創立期に比べると大変規模が大きくなった。それにともない、今後も、建学の精神に沿って教育内容をより充実し、より高度にしていきたい。

戦時中、キリスト教が批判的となったとき、日本人キリスト者波多野培根の存在は学院にとって大きく、精神的支柱となった。彼が中学部の教師として就任するときにドージャー院長が語ったとしてメモに書き残しているのが、“It is our purpose to make a good school, not a big one” という言葉だった。『西南新聞』第65号（1947年9月15日付）にも、ドージャーが「big schoolではなく、good schoolたらしめねばならぬと常に語られた」と掲載されている。「西南よ、キリストに忠実なれ」の建学の精神に基づいて、「真理の探求および優れた人格形成に励み、地域社会および国際社会に奉仕する創造的な人材を育てること」というミッションに向けて、ますます力を結集しなければならない。学院史資料センターは、その一助になることが望まれている。